

Medical journalist 100号記念号 2024年8月1日発行

日本医学ジャーナリスト協会の前身

「7人の会」が切り開いたこと

「7人の会」は、不思議な会でした。所属する組織はライバルどうし。にもかかわらず、集まっては、日本の医療を憂えたり、エールを送りあったり、本を書くとき、あらかじめ読みあったり。

のちの医学ジャーナリスト協会賞の評価基準になった「社会へのインパクト」「オリジナリティ」「科学性」「表現力」に加えて、「患者の視点」「医学界や政府への反骨精神」を秘めていました。

●「染色体」から「誤診・薬禍」「診療報酬」まで幅広いレパートリー



最年長の岡本正さんは1921年生れ。若いころ、結核で死線をさまよった経験の持ち主です。

日本初の“患者の、患者による、患者のための雑誌”、『保健同人』の編集長でした。

左の写真は、この雑誌の表紙です。

日本画壇の巨匠・東山魁夷さんが、若き日、表紙だけでなく、挿絵まで手がけました。弟さんが、結核を病んでいたのです。

2歳年下の大熊房太郎さんは、教授選と医療過誤をテーマに、後に映画やテレビになった『白い巨頭』をサンデー毎日編集部で手がけました。

医学博士号をもち、「あれは、山崎豊子じゃなくて、僕がほとんど書いたんだ」と豪語するのが常でした。

房太郎さんと性格が真逆な青柳精一さんは会のまとめ役。1924年生れ

で、朝日新聞社の「モダンメディスン」編集長。医療制度とその歴史に関心が深く、著書、『近代医療のあけぼの～幕末・明治の医事制度』『診療報酬の歴史』は、「具体的な資料を使いながら、政治を動かした人物を彩り豊かに描いた」と評価されていました。

昨年亡くなった医学ジャーナリスト協会・第2代会長、伊藤正治さんは1925年生れ。「いつもニコニコした優しい人」とだけ思っている若い方がいるかもしれませんが、実は、医学ジャーナリストの草分けでした。

共同通信から発信した記事は全国に配信され、『成人病のすべて』『痛みのカルテ』『こどもの病気』などにまとめられました。

「全国各地を訪ね歩き、一般の人がわかり、しかも正しい。そこが、専門家が書いた解説書とは違う」と医学界の重鎮にも一目置かれました。

村松博雄さん。1926年生れの産婦人科医で、おだやかな人柄、あたたかな言葉づかいで、テレビドクターとして著名でした。

『ぼくは町医者』『10代の愛と性』などの多数のベストセラーに加えて、『性教育学入門』のような学術書もあります。伊藤正治さんが唯一踏みこめなかった、当時は眉ひそめられた性教育の分野で、数多くの著書を出しました。そのときの絆が、のちの「調査報道」につながりました。

読売新聞の宮野晴雄さんは1928年生れ。『染色体は語る』『ビールスを追って』の連載など、純医学的な科学記者の草分けとして知られていました。

ところが1973年、『誤診と薬禍～医学記者の提言』を書いて、医学界を騒然とさせました。誤診や薬禍の背景にある構造の分析は鋭く、その指摘はいまも通用します。

はにかみやで謙虚な方なので知らなかったのですが、東大法学部出身。「法学」という特技を発揮したことを、後で知りました。

医学ジャーナリスト協会が、宮田親平・第3代会長のもとで『人は誰でも間違える～より安全な医療システムを目指して』、大野善三・第4代会長のもとで『患者の権利宣言と医療職の倫理綱領』を翻訳して出版したのが2000年と2003年です。それより30年も前に医療過誤が生れる構造を明らかにした宮野晴雄さんの先見の明に、いまさらながら感動してしまいます。

●「雨乞いの論理」「3“た”の論理」「プラセボ効果」

この6人と年が離れていたのが、1934年生まれの小枝一夫さんでした。北海道新聞の科学記者時代の連載『生命を探検する～分子生物学』が注目されて講

談社のブルーバックスに加えられました。そのブルーバックス編集部に転身。

手がけた本『薬の効果・逆効果～臨床薬理学入門』や『ただしい治療あやしい治療～紅茶キノコからがんワクチンまで』（右の写真）は、当時の医学界の常識をくつがえすものでした。



「男子に限る」と募集要項に書き続けていた新聞社が、ほんの一瞬、扉をあけた年がありました。東京オリンピックを2年後に控えた1963年のことです。

「オリンピックの華は、女子選手村。ところが、そこは男子禁制」と知って。どの社もあわてふためき、渋々、女性を1人ずつ採用。私も朝日新聞にもぐりこむことができました。

もともとが“リケジョ”の私、オリンピックが終わって、念願の科学部に。

当時の科学部の先輩方は、天文、数学などアカデミックな香り高い分野を深めておられ、入社3年目の超下っ端の私は、先輩が敬遠する健康分野を受け持つことになりました。指南役がないので「心細さも極まれり」の私を、朝日新聞の先輩、青柳さんが、この会に誘って下さいました。

ちょうど、大熊房太郎さんが抜けたところだったので、房太郎を由紀子に変えて「7人の会」が再発足しました。よく間違えられるのですが、房太郎さんと私、血のつながりはまったくありません。

科学部の使命の1つは、社会部や支局、経済部が出稿してくる“非科学的な医学記事”を、出稿部の誇りを傷つけず、どうやったら朝日新聞の紙面からなくせるかでした。小枝さんのご紹介で懇意になった『薬の効果・逆効果』の著者、佐久間昭教授が発明した言葉が、征伐に威力を発揮しました。

1つは、「3“た”の論理」。「使った⇒治った⇒だからこのクスリが効いたのだ」という、「前後関係」を「因果関係」を取り違えた記事を、ボツにすることができました。

「よく効くお薬ですよ」とお医者さんが渡すとメリケン粉でも効いてしまう「プラセボ効果」、人間のからだにそなわっている「自然治癒力」を、因果関係と錯覚してしまう。そのようなことが、専門家と呼ばれる人たちに知られていな

かった時代でした。

佐久間さんは「雨乞いの論理」という言葉も“発明”しました。

「雨が降りますように、と太鼓を叩き続けた⇒雨が降った⇒神様がお聞き届けくださったのだ」に似ているというのです。雨乞いは、雨が降るまで太鼓を打ち続けるのですから、かならず雨は振ります。

それと同様の「薬効についてのまことしやかな研究成果」が、大手を振って学会で発表されていたのでした。

●名誉院長の連続医療過誤事件

糖尿病で目が不自由になり、その上、当時のことばで「脳軟化」、いまでいう認知症になった名誉院長が自信に満ちて手術を続け、まわりはただオロオロしている。そして次々と出る犠牲者。

そんな恐ろしい日々にストップをかけた記事も「7人の会」から生れました。何とかして院長の暴走を止めなければと憂えた産婦人科医局長・謝国権さんと私を、村松博雄さんがこっそり引き合わせてくださり、医学的な助言もしてくださいました。

村松さんと謝さんのお二人は、当時、袋だたきにあいながらも「性についての正しい知識」を世に知らせようとした同志だったのです。

私は、被害者の住所氏名の一覧表を受け取り、一軒一軒訪ね歩きました。

無謀な手術で母が亡くなった日の2日前が誕生日という幼な子に出あったときは、涙がとまりませんでした。

「調査報道」という言葉がなかった時代でした。

「厚生省の調べでは」とか、「警察の発表では」という「つかえ棒」もなく、記事が日の目をみるには何重もの困難がありました。

それを、やっとのことで乗り越えて1969年6月1日、朝日新聞の朝刊社会面に記事がでて、院長は引退し、被害はとまりました。

●必要なかった和田心臓移植

各紙の記者たちが称賛した札幌医大・和田寿郎教授の心臓移植。

1968年8月8日未明の第一報を聞いたとき、私は、なんだかおかしいと思いました。心臓を提供することになった山口青年は、海で溺れたあと、はるばる札幌医大に運ばれ、「蘇生」のために人工心肺が使われたというのです。蘇生の目的で人工心肺を使うなんて聞いたことがありません。

心臓を生きのよい状態に保つためではないかと私は疑いました。

疑念はもう1つありました。和田教授の論文が専門誌『移植』に1度も載っ

たことがなかったからです。

拒絶反応をのりこえられるだろうかと気がかりでした。

7人の会でこの疑問について話してから2年たった1970年の5月、読売の宮野晴雄さんから電話がありました。札幌医大内科の宮原光夫教授が専門誌『内科』の論文の中に、ごく小さな文字で、〈注〉のかたちで心電図や心音データを示して、「移植は不必要だった」とほのめかしている」というのです。

早速、宮原教授を訪ねました。ところが、大学から内部告発者と思われることを恐れて、逃げるばかり。

ただ、宮原さんと話しているうちにわかったことがありました。亡くなった宮崎信夫少年の遺体を解剖した病理学の藤本輝夫教授が、「医学者として、あつてはならないことが行なわれた」と憤慨しているというのです。

論文がでるのを待ちました。

藤本さんは「行間に滲ませ」たり「ほのめかしたり」することもなく、「少年の心臓の弁は、重症の別人のものとしり替えられていた」「血液型などから、それは明らかである」と論文ではっきり指摘していました。

和田教授は宮崎少年の病状について「心臓の3つの弁が、3つとも、箸にも棒にもかからない絶望的な状態だった。だから移植するしかなかった」と記者たちにくりかえし伝えていました。

「3つの弁のうちの1つだけをとりかえてほしい」と心臓内科が和田教授の心臓外科に送ったのにもかかわらず、です。

1つの弁だけを取り替える手術をしていたら、宮崎少年は手術後83日で死んだりしなかったことでしょう。

この問題では、その後、日弁連が調査委員会を作りました。

岡本正さんが司会役をしたシンポジウム『和田心臓移植を告発する～医学の進歩と病者の人権』は保健同人社から出版されました。この本には若月俊一さん、中川米造さん、松田道夫さん、中川善之介さんたち重鎮、作家として有名になる前の札幌医大整形外科講師の渡辺淳一さんが参加して、「無謀な実験的医療」への歯止めの役割を果たしました。

●そして、次々と世を去って。。。

7人の会の先輩たちは、みな、次々と旅立ってしまわれました。いま生きているのは私だけです。

忘れられないのは、岡本正さんの葬儀でした。

それは1980年の1月13日の寒い日のことでした。駆けつけた約500人全員に1通の手紙が配られました。

「私は、いま死に直面して、少しの不安もなく、みなさまへの生前のご厚情への感謝だけに心がみたされています。そのことを私からもうしあげたかったのです。……ご会葬のみなさま、遠慮など、くれぐれもなさらないように。ふきっさらしの道でふるえてはいけません。どうぞご遠慮なく。」

この手紙。夫人を悲しませないようにと、夫人のいないすきに岡本さんが実弟に頼み、暮れには、印刷を終えていたのでした。

雪のなかを駆けつけた誰もが、「岡本さんらしいなあ」と手紙に見入っていました。

日本医学ジャーナリスト協会の機関紙 Medical journalist はモノクロ。東山魁夷さんの表紙がモノクロでは、もったいないので、カラー にしました。スペースの関係で削った文章を少しだけ復活しました。